

春の草孤独がわれを鍛へしよ

藤田湘子

私が出会った頃の湘子は、精気みなぎる壮年期「お祭り湘子」と呼ばれていたくらい賑やかなことが好きな人であった。そんな湘子に孤独は似合わない。悲痛な呟きが心に残る句である。

掲句が「鷹」に発表されたのは平成十一年四月号、七十三才の時。三十五周年を迎え「第二次鷹」を発足、中央例会大阪を新設するなど、まだまだ精力的に動いていた頃である。何が湘子をさみしくさせたのか。

同年八月号では編集長が小川軽舟に変更。前編集長の小澤實が退会。一年後には晴子を失うことを予知するかのような、ひたひたとくる孤独感を懸命に肯おうとしている、傷ついた湘子を感じずにはいられない。

1999年（三作）第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京